

## セナーブルの死

野村, 知佐子

<https://doi.org/10.15017/10026>

---

出版情報 : Stella. 19, pp.81-91, 2000-09-05. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# セナーブルの死

野村知佐子

『悪魔の陽の下に』（1926年）につづくベルナノスの2つの小説『欺瞞』（1927年）と『歎び』（1929年）は、当初『闇』というひとつの長編小説として構想されていた<sup>1)</sup>。経済的な事情や時間不足などから分割発表を余儀なくされたこれらの小説における中心人物は、信仰を失った司祭セナーブルである。この人物は、その知性と、とりわけ彼と好対照をなすシュヴァンスとジャンタルの存在のために、ともすればウィーヌ氏をはじめとする知的で悪魔的な人物のひとりとしてとらえられている。だが2人の聖人に対する彼の係わりやその死について考えるとき、そこには悪魔的なものとは性質を異にする姿が浮かび上がってくるように思われる。本稿は『悪魔の陽の下に』のドニサン神父の姿を参照しつつ、信仰を喪失したセナーブルの絶望的な彷徨と死のなかに否定的なそれではなくむしろ肯定的な側面を見いだす試みである。

\*

ポール・クロードルは1926年にベルナノスへの手紙のなかで次のように『悪魔の陽の下に』の感想を述べている――

あなたの力は偉大ですが、時としてそれは混乱しています。あなたの主人公ははっきりした印象を与えません。交互に優位に立つふたつの観念のあいだであなたは迷っているように見うけられます。ひとつはアルスの司祭のような憔悴した苦行者としてのそれ、もうひとつは、あなた独自のものであって、私にはいっそう興味深く思われるのですが、聖パウロの言うような、体をはって闇の力と戦うことを恐れない、テーブルの上ですべてを、自分の永遠の救いさえも投げ出す、あまりにも人間的な戦士のそれです。彼をつき動かすのは神への愛なのか、力ゆえの傲慢さなのか、作品のなかでは2番目の力のほうが優勢なように思われます。<sup>2)</sup>

このクローデルの言葉を受けてマルト・モリナリもまた、ドニサンの絶望の過剰さは彼の無疵の清貧にもかかわらず反キリスト教的様相を帯びるとし、ベルナノスがこの司祭に与えた属性を曖昧であると批判している<sup>3)</sup>。しかしドニサンの性質に二義性があるとすればそれは欠陥ではなく、ドニサンという人物の神に対する関係性が二義的なためであることは指摘するまでもあるまい。じじつ、神から与えられた過剰な力を謙虚に受け入れることのできる聖人としてのそれと神の摂理の不条理に憤るという人間的なそれというドニサンの2つの属性は、『欺瞞』と『歎び』の2人の司祭シュヴァンスとセナーブルにそれぞれ受け継がれることとなる。そのため同様の行為にあってもドニサンにとって二義的であることが、シュヴァンスとセナーブルにとってはそれぞれ一方の意味しかもたない。

たとえば悪魔との戦いに敗れた後ドニサンは「死にいたるまで手をかざし、許し、赦免を与え」[S, 275] なければならない。聖人としての自己放棄を手にしていないにもかかわらず、彼には奇跡をおこす力が委ねられており、聖人として行為しなければならないのである。奇跡が与えられ、それを行使しながらも彼は全面的に神に服従しえない。いっぽう手をかざし祝福を与えるという行為に対する懐疑の色はシュヴァンスには認められない。セナーブルから信仰を失ったという告白を聞かされたときシュヴァンスは彼に言う――

「しかしたとえ悪魔の側にいたとしても、私たちのうちの誰が父と子と精霊の御名において見事に祝福を与えられないことがありますか。ああ、それは真実なのです。確かなことなのです。勝るとも劣らぬほど惨めな同朋に、神を冒瀆することなく、あなたはご自身ではもはやおもちでない恩寵をもたらすことがおできになるのです」[I, 347]

自分では得ることのできぬ「恩寵」を、神の名において与えることができると信じるのは究極的な従順以外のなにものでもなかろう。ドニサンにあっては神への懐疑のなかでなされる祝福の行為は、シュヴァンスにあってはただなすべきであるがゆえになすという単純さに貫かれている<sup>4)</sup>。また彼にとっては聖性とは理解不可能なものであるがゆえに、信仰者が神を信じることと信じられぬことの間を常に揺れ動くことさえ自明の理である。当然セナーブルの「私は信仰を失った」[I, 344] ということばはシュヴァンスにとって驚くにはあたら

ない。むしろそれは神に対する絶えざる関心の証しであり、彼を安心させこそすれ不安にするものではない。シュヴァンスのこの非凡さ、揺るぎのない信仰は、ドニサンのそれをさらに推し進めたものであると言えよう。彼のなかには悪魔を身内から追い立てようと自分自身を鞭打つ絶望の誘惑は認められない。

ついでドニサンはカルワリオの悲劇について次のように言う――

カルワリオの悲劇、とあなたがたはいう……。しかしそれは、まちがいなくあなたたちの眼をつぶすものなのだ、それ以外のものはなにもない…… [S, 255]

奇跡を謙虚に実践しながらも、悪魔の仲介という信仰の逆説を受け入れることのできない彼にとってカルワリオの悲劇とは「われわれの目をつぶすもの」であり、神の子は罪人たちの餌食である。ここにおいてキリストの受難とは神の摂理の不条理さを前に絶望的な戦いを挑む「超人間的」なドニサン自身の似姿に他ならない。いっぼう聖職者になることだけが自分の貧しい生まれから逃れる唯一の手段であったセナーブルは、少年時代から司祭になるべくあらゆる厳しい実践を自らに科してきた。しかしキリストの受難に対する彼の恐れと嫌悪はいかんともしがたいものであった。告解司祭から眠りにつく前に必ずキリストの受難について想起するよう申し渡された彼は十字架の前で汗を流し、うめき声をあげることさえ出来ではなかったほどである。それにもかかわらず彼はこの恐れそのものさえ自身を真の聖職者と見せかけるために巧みに利用することも忘れなかった。セナーブルのキリストの受難像を見つめるまなざしは完全に生身の人間のものであり、ややもすれば功利的ですらある。彼は数々の聖人伝を書く。その過程において彼は聖性の秘密を探りあてようとする。しかしその試みは全て徒労に終わる――

架空の財産のうんざりするような追及、彼ら〔聖人たち〕の運命の恐るべき空虚さに、今さらどうして興味を抱けるといえるのか？ 疑うこともなく、彼は心の底で聖人たちから秘密を引き出せるという希望に駆り立てられていた、だが、彼らには秘密などないこと、何もないことが彼にはよくわかった。[I, 371]

ドニサンは「悪魔の陽」[S, 237] というべき認識の魔にとり憑かれたために信仰に躓くが、知的なセナーブルは最初から躓いている。聖なるものが理性の

範疇を越えているため、知的な彼にはそれをつかまえることができないのである。なぜなら十字架上のキリストは神のひとり子でありながら彼のはいだしてきた生まれよりもさらに惨めなものにほかならないからである。彼の理性が耐えられぬのはキリスト教そのものの孕むこうした逆説であると言えよう。「まるで神がひとつの障害、乗り越えなければならぬ最後の試練としか思えぬような瞬間があるものです」[J, 718-719] という彼の言葉以上に明晰にこの逆説を乗り越えることの困難さを表したものはあるまい。このようにドニサンとセナーブルが斉しく躓いたものは受難のキリストの姿であると言える。最もドニサンが神の恩寵を謙虚に受け入れる側面もあるのに対し、セナーブルの理性は聖なるものを受けつけぬことから、認識の魔に苦しめられるドニサンの姿はセナーブルにおいてより徹底的に描かれていると言えるだろう。

以上のように『悪魔の陽の下に』のドニサン神父と比較したとき、シュヴァンスがシャンタルとともにこの人物の聖なる側面を受け継いでいることは言うまでもない。しかしいっぽう、セナーブルもまたその研ぎ澄まされた理性によって、悪魔とかかわったドニサンの魂の一面を担っているとは言えまいか。とすれば彼はウィーヌをはじめとする冷たい明晰さをもつ人物たちとは一線を画する存在であるということが出来る。では彼のこの特異性は作品のなかでどのように表現され、いかなる意味をもつものであろうか。

\*

アンドレ・マルローは、ベルナノスの登場人物の行動はドストエフスキーのそれと同様、理性的規範や心理分析では説明不可能であると指摘している。まず人物の不安が描かれる。それから登場人物は行動を起こす。その行動とは、彼らがそのときまでその実行を拒んできたような行動、自分自身にさえも隠しとおしてきたような動機をもつ行動であるという<sup>5)</sup>。このマルローの指摘のように、セナーブルは凡庸なジャーナリスト、ペルニションとの対話のうちに抗いがたい憤りを感じる。ペルニションを追い返したのち、彼はその不合理な怒りが自分自身の信仰喪失の認識に根ざしていることを知る。また、セナーブルがシュヴァンスに対して投げた「私は今夜、本気で死ぬことを考えたのだ」[I, 345] という言葉は彼自身にさえ思いもよらぬものであるが、シュヴァン

スト別れたあとその言葉に誘われるように彼は自殺をこころみる。このように人物の行動が単なる心理分析で説明できるものではないとすればそれは、ベルナノスの作品世界が可能性が現実性へと移行する直前の不安な状況を描いているからにはかならない。こうした極限的狀況下では些細なものが誘惑的に作用するため、たったひとつの言葉や目配せのもつ影響力は不合理なほどに大きくなるのである。些細なものさえ特殊な意味を帯びるのであるから、登場人物同士の出会いがいかに重要であるかは断るまでもあるまい。『悪魔の陽の下に』においてアカデミー・フランセーズのサン・マランとランブルの聖者との出会いは、聖者の死によって実現されなかった。これは彼らの属性がけって交わらないことを意味するといっても過言ではない。しかるにセナーブルとペルニシヨンの対話によって幕を開ける『欺瞞』の冒頭部で、前者は後者のなかに自身の似姿を感じとりこれを憎むのだが、2人の別れの後、彼らの歩みは再び交わることはない。魂の危機に瀕したセナーブルが結果的には拒絶しこそすれシュヴァンスという聖人を呼び寄せ『歎び』の最後でこの聖人の精神的弟子であるシャンタルと対峙するのにひきかえ、ペルニシヨンはゲルーのサロンでエスプレットやカタニら小心な知識人に囲まれ、自分のジャーナリストとしてのキャリアが危機にさらされるのを見る。社会的地位と精神的安定の回復を図って彼はウィースを連想させる悪魔的人物ゲルーを訪れるが、その訪問によって彼の破滅は決定的となる。ゲルーに自分の姿を見透かされ、絶望へと誘われた彼は死を選んでしまうのである。セナーブルとペルニシヨンの物語は水源を同じくしながらも2つに別れて再び交わることのない川のように乖離したまま並列し進行する。互いに見知っていることが物語のなかで示されながらも、セナーブルと悪魔的なゲルーの出会いのシーンは描かれず、この司祭が小心な知識人と同じ場に置かれることはない。同様にして、ペルニシヨンが聖なる属性をもつシュヴァンスやシャンタルにまみえる場面も存在しない。セナーブルとペルニシヨンの生は彼らの決裂以後、見えない壁に隔てられているかのようである。

ドニサンとの類似点からセナーブルが聖人ではなく人間に属していることは先に述べたが、ペルニシヨンとの相違点から彼が単に凡庸な人物に属しているのではないこともまた明らかであろう。彼は凡庸な人間のなかに自己像を投影しながらも、聖人たちと対峙することを許された存在なのである。ここで凡庸

な司祭に関して作中で語られている事柄を引用したい——

少なくとも彼らが凡庸な司祭であることはほぼ完全にたやすく見分けられる。彼らの悲しい人生の曖昧さは不安と疑惑、召命を欠いているという悲劇すべてによって贖われている。だが彼〔＝セナーブル〕のほうは中途半端に嘘をつくことはないし、中途半端に嘘をついてきたためしもなかった。

そもそもこの絶対的な嘘が無条件で完全に受け入れられたものでなければ、彼にはしっかりともちこたえる勇気も欠けていたことだろう。なぜなら彼は激しい情熱をもっていたからである。[I, 363]

凡庸な司祭は周囲の人々の期待や見栄に負けて司祭の役を演じつづける。しかし彼らは自分の凡庸さを認識している。したがって彼らの自己欺瞞もまた根深いものではない。いっぽうセナーブルは過剰な情熱と誇りをもつがゆえに自分に召命がないことを信じようとしなかった。そのため彼の自己欺瞞はより深刻で完全なものとなる。ベルニションとシュヴァンスとの対話を通じて彼が知ったのは、自分は凡庸ではないがしかし聖人になることはできないという事実である。こうした認識にセナーブルは強いジレンマを覚える。このジレンマはセナーブルがシャンタルに対して向けた次の言葉のなかに結晶しているように思われる——

「あなたはずっと単純だったし、今もそうだ。ユダヤ人たちがその姿を見たものは命を失うこともありうると語ったヤーヴェの姿にそれは似ている」[J, 696]

数々の聖人伝を書くことでその秘密を探り出そうという試み、聖人たちを愛しているとさえ思っていた彼のなかにあるのは、ただ聖人になることができないという悲しみだけである。シュヴァンスやシャンタルの姿は「単純」である。その単純さにセナーブルは近づけない。心より切望しながらも不可能なものが目の前に存在するとき、彼の情熱はまたそれを拒絶せずにはおれない。2人の聖人の信仰を前にセナーブルは怒りの発作にとらわれ、そこから逃げださずにはおれないのである。

しかし彼の聖なるものからの逃走にもかかわらず、シャンタルはその死によってセナーブルに聖なるものをつきつけるのだ。これは彼の理性の崩壊さ

せ、彼自身の存在そのものをも崩壊させる。かくして彼女の死はセナーブルを狂気に陥れ、その命を奪うことになる。かつて彼はシュヴァンスをはねつけることによって涙の泉を開くことを拒み、浮浪者アンブロワーズのなかに見いだした共感にも心を閉ざした。ベルナノスの作品世界において個人を救いへと導くべく秘密が作用するためには共感や愛という媒介が必要とされる。『田舎司祭の日記』で神との和解を成立させた伯爵夫人は、息子への愛のゆえにこそこの和解をなしとげることができたと言えるし、その死への歩みがカルワリオの丘への行進に匹敵するとエルネスト・ボーモンの指摘する『カルメル会修道女の対話』のブランシュは、仲間の修道女たちへの友愛に支えられている<sup>6)</sup>。しかるにセナーブルは他者への愛と共感を拒絶しつづける。とりわけ浮浪者アンブロワーズが、その惨めさゆえに彼と生まれを同じくする者であることを思えば、彼はこの拒絶によって自分の子供時代そのものを拒絶したといえることができる。セウン・ストルーウは、この拒絶によって彼の自己欺瞞は完成を見ると指摘している<sup>7)</sup>。自己欺瞞を極限までおしすすめたセナーブルにもし救いの可能性が残されているとすれば、それはヤーヴェの顔を直視するという聖性のもっとも苛酷な側面だけだったのであるまいか。シャンタルのむごたらしい死とは彼にとってヤーヴェの顔そのものであったと言えまいか。キリストの受難への抗しがたい嫌悪だけが神との唯一のつながりであった彼にとって、「障害」のように立ちはだかる神の姿をのりこえる以外の選択肢は残されていなかったかのようである。逆説的だが、彼は聖なるものへの嫌悪によってのみ聖なるものとの関係を保持していたと言える。

\*

セナーブルの秘密はその欺瞞にもかかわらずキリストへの嫌悪というかたちで生きつづけた。自分の悪徳のなかに埋もれ「私の家が地獄なのだ」[I, 437]という言葉の口にしたゲルー、聖人たちと対峙する可能性も与えられず自殺を選んだベルニョンと比較したとき、セナーブルが神を拒みつづけたという事実にもかかわらず、彼が聖人たちとの対峙を許されたことは特権的であると言える。しかし彼の特異性はそれだけではない。次の引用はシャンタルの死の場面に遭遇したセナーブルを描写したものである――



司祭は部屋に入り、入口に立ちはだかったまま、まるで何を探しているのかをわきまえ、もはや顔を背けようとはしない男のように、その場の光景を見渡した。[J, 723]

ジャンタルの死を発見するのは料理女のフェルナンドであるが、この女性は彼女が唯一信頼と親愛の情を抱いていた人間であることを考慮すれば、この役回りは必然であろう。しかしここでセナーブルもまた同様にジャンタルの死体の横たわった部屋へ足を踏み入れることを見逃してはならない。『悪魔の陽の下に』においてドニサンは、リュザリュヌの司祭が子供を蘇らせようという試みの場に入ることをおしとどめ、サン・マランに告解室のなかへ足を踏み入れさせることを拒んだ。またドニサンをその使命に目覚めさせる役割を担ったムヌ＝スグレでさえ敷居の外にとどまることを余儀なくされていたことを思えば、セナーブルの、この敷居の内部への侵入はさらなる異例な事態であると言えよう<sup>8)</sup>。彼は理性的人間でありながら聖人と対峙するだけではなく、聖なる空間の内部に足を踏み入れることさえ許されているのである。

イエスが神の手から死を受けとったようにジャンタルが己の死を単純に受け入れるのを目のあたりにしたとき、セナーブルは逃れようもなく神の視線が自分のうえに注がれるのを感じる。彼女の死の場面はドニサンやアンブリクールの司祭が共に直面した子供の死の場面に匹敵するといっても過言ではなからう。この死の場面がキリストとの邂逅の可能性を孕んだ聖なる空間であるなら、彼女の死もまたセナーブルに神の恩寵を受け入れるか否かという究極的な選択を強いるものであると言える。アストリッド・ヘイヤーは、セナーブルがジャンタルとの対話に見も心も疲れ果てひとり庭に佇んでいる場面で、頭部に光の塊のようなものを感じて思わずこめかみに手をやったそのときをジャンタルがフォードルの手によって命を失った瞬間であるとし、彼女はその死によってセナーブルの罪を贖ったとしている<sup>9)</sup>。しかしドニサンが死んだ子供を蘇らせることに失敗して悪魔に敗れ、アンブリクールの司祭がそれに成功することによって真に神との親密な関係性の内に入っていったことに表されるように、ジャンタルの死は聖なるものでありながらも、単にセナーブルに選択を迫るだけの役割しか果たしていないのではないかと思われる。

いっぽうセナーブルの死にかんしてはモニク・ゴスランは、おおよそ次のように述べている——。ジャンタルの死をまのあたりにしたセナーブルは主祷文

を唱えようとするが、その声は超人的な響きを帯びる。彼の声はセナーブルが聖なるものの前に類づいたことを表しており、自分自身の限界に気づいたことを意味するのであるが、同時に「超人間的」という表現はドニサン神父の形容においてもしばしば見うけられるものであり、これは神への挑戦を意味するものであると。そしてゴスランはベルナノスが原稿に、昏倒したセナーブルが「理性を回復せず」[J, 724] 病院で亡くなったと書きこんでいることを受けてつぎのように指摘する。すなわち出エジプト記の、神の顔を見たものは死ぬという言葉のようにこの司祭がシャンタルの死をまのあたりにしながらもその直後に命を失わず、狂気の闇におちたまま死を迎えるとするれば、それは彼の傲慢さがもはや彼を他のものにはなしえぬほど深刻なものとなっていたことを意味すると<sup>10)</sup>。つまりセナーブルは最後まで自己を手放すことができず、神によって打ち砕かれたということである。

しかしながらセナーブルが最後の瞬間まで理性を手放さず、神にあらがうことをやめなかったとすれば、それにもかかわらず彼に注がれつづけた神の視線とはなになのであろうか。神は最後まで逆らいつづける人間を見つめることをやめなかった。これは神の愛の証し以外のなにものでもないのではないか。シャンタルの「神さまは気に入った人だけをごらんになる」[J, 549] という不可解な言葉は彼の死においてその意味を明らかにするように思われる。セナーブルは狂気に落ちる寸前に「我らの父よ」[J, 724] と言う。むろんこれは主祷文の一節であるが、彼のこの最後の神への呼びかけが子なる神の方ではなく父なる神に対してなされたという事実は特筆すべきであろう。神の視線から逃れようとしながらもなおも見つめられつづけた彼にとっての神とは、ただ畏怖するだけの対象である父なる神でなくてはならないからである。セナーブルは神みずからの手によって追いつめられた。「あなたの憐れみはけっして倦むことはなく、いたるところで私たちに剣の切先をつきつけられます」[S, 307] というランブルの聖者の最期の言葉は、彼にとってもまた似つかわしいものであるとってよかろう。

## 結 語

『欺瞞』と『歎び』を通してシュヴァンスとシャンタルのなかに聖なるもの、

超越的なものを見ることができるとすれば、セナーブルのなかには人間的な苦しみを見ることができるといえる。『悪魔の陽の下に』ではドニサンというひとりの人物のなかで錯綜していた聖なるものと人間的なものは異なる登場人物のなかで独立し、双方の意味はより明らかなものになったと思われる。とりわけドニサン神父の躓きの側面はセナーブルにおいてよりいっそう明確化され、強調されている。彼の姿は、キルケゴールの『人生航路の諸段階』のなかの言葉である「神は敬虔な者の神ではなく、神にそむく者の神であり、神に選ばれた者になるためには神にそむく者にならなければならない」というものを思い起こさせる<sup>11)</sup>。セナーブルの拒絶にもかかわらず神は倦むことなく彼に対して憐れみを注ぎつづけた。神にそむきつづけてきた彼は、その拒絶ゆえに「障害」のように立ちはだかる最も苛酷な神の顔と直面することを余儀なくされたかのである。最後まで自己を放棄することができなかつたセナーブルは神の手によって打ち砕かれる。しかしここに見てとれるのは否定的なものではなく、むしろ恐るべき神の愛を間近で見ることができた非凡な人間の姿ではなかろうか。

## 註

- 1) 『欺瞞』と『歎び』、『悪魔の陽の下に』のテキストとしては、プレイアッド版『小説集』(Georges BERNANOS, *Œuvres romanesques*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1988) を使用し、同版からの引用にあたっては、そのページ数のみ本文中 [ ] 内に示す。訳出にあたっては山崎庸一郎氏による邦訳(『ベルナノス著作集』第1巻, 春秋社, 1976年)を参考にした。なお、それぞれの作品を区別するために [ ] 内ページ数の前にそれぞれ『欺瞞』はI, 『歎び』はJ, 『悪魔の陽の下に』はSを記す。
- 2) Voir *ibid.*, pp. 1787-1788.
- 3) Voir Marthe MOLINARI, «Donissan, le champion de Dieu», in *Études bernano-siennes* 3/4, Paris : Lettres Modernes Minard, 1963, pp. 109-137
- 4) キルケゴールは『死に至る病』のなかで、「なんじ、罪の許しを信ずべし」という言葉と、その注釈である「もしなんじがそれをなすべからば、なんじは不幸を招くであろう。なぜならひとは、そのなすべきことをなすのだからである」を挙げ、これこそが宗教的原理であるとする。シュヴァンスの行動のなかに見られるのはこの原理である。梶田啓三郎『キルケゴール』, 筑摩書房「世界文学大系」第27巻, 1961年, 367頁参照。

- 5) Voir BERNANOS, *Ceuvres romanesques*, op. cit., p. 1794. ベルナノスはドストエフスキーに敬意を抱いていた。彼はドストエフスキーとユゴーを比べたとき、そこには水平線の真の発見者と実地の経験のない航海者ほどのちがいがあるとしている。Voir Monique GOSSELIN, *L'écriture du surnaturel dans l'œuvre romanesque de Georges Bernanos*, Paris: Aux Amateurs de Livres, 2 vol., 1989, t. I, p. 163.
- 6) ボーモンは『カルメル会修道女の対話』ではゲッセマニーの園の強調がなされるだけでなく、不安が神聖なものとされていることから、キリストの人間性がここでは強調されていると述べる。つまり、幼いころから死への不安にとり憑かれていたブランシュが最後の瞬間に死を受け入れ、仲間の修道女とともに命を投げ出すとすれば、彼女のたどってきた一生はカルワリオの丘への行進だったということになる。Voir Ernest BEAUMONT, «Le sens christique de l'œuvre romanesque de Bernanos», in *Études bernanosiennes* 3/4, op. cit., pp. 87-104.
- 7) Voir Sven STORELV, «Le Thème du Mensonge», in *ibid.*, 1963, pp. 39-45 セナーブルはその知性によって自己自身を二重化する。それは自分を見る者と見られる者へと分裂させることである。彼が自殺の試みをいったん中断するとき、その直後には自殺は無益でばかばかしいものと映る。
- 8) Voir Pierre VERDIEL, *Le seuil. Présence et parole. Essai de topo-analyse dans «Sous le soleil de Satan» de Bernanos*, Paris: Lettres Modernes Minard, 1986, pp. 108-110.
- 9) Voir Astrid HEYER, *La femme dans le monde imaginaire de Georges Bernanos*, New York: Peter Lang Publishing, 1999, p. 77.
- 10) Voir GOSSELIN, *op.cit.*, t. I, p. 162.
- 11) 引用した文は次のような物語のなかで使われている。すなわち、若きソロモンが父ダビデ王を訪れたある日、彼は人々の誇りである父王が深夜ひとり憂悶に沈む姿に激しい衝撃を受ける。その夜、彼は夢を見る。ダビデ王が人々を支配し、愛され、敬われているのは実は神の罰のゆえだというものである。小川圭治『キルケゴール』、講談社「人類の知的遺産」第48巻、1979年、309-312頁参照。